大切なのは、まず、あいさつやマナー。

スポーツを通して、社会貢献、地域貢献

専門はもとより、スポーツをはじめ、さまざまな分野での社会貢献、地域貢献が、大学にも求められるようになっている。専修大学の建学の精神は「報恩奉仕」であり、本学出身者の中には、小中学生・高校生・大学生などのスポーツ指導を通して、この精神を実践している教友がいる。座談会では、その苦労、やりがい、指導するのもどこか通じ合ってもらった。

野球、サッカー、ラグビーに対する人一倍の情熱。

――まずは自己紹介を。簡単にお願いします。

中津川●栃木県出身、社会人野球の「日綿実業団千葉」（現・JFE東日本）に入社しました。そこである程度の強豪チームでやり、指導経験豊富な監督様に、基礎基礎からトレーニングまで、その後、30歳まで現役で硬式野球をやっていました。

仕事としては、スポーツマネジメントの会社を経営しており、複数団体などに関係がある競技クラブなどの運営も行っています。

また、「専修大学スポーツ・サポーターズクラブ」の事務局長も務めています。

佐々木●卒業した年にJリーグ「川崎フロンターレ」の、スクール担当部門に入りました。いまも移行川崎フロンターレにありますが、2000年から専修大学サッカー部のコーチも兼任しています。普段の活動でサッカー部の現場に行く回数は減りましたが、コーチとして籍は持っています。

岩崎●現在、総合電機メーカー「東芝」に勤務しています。専修大学校友会の体育振興部部長も務めています。

今回の座談会のテーマと関連しますが、東芝ラグビー部「東芝ブレイブルーパス」傘下の「東京ジュニアラグビークラブ」というスポーツクラブで、マネージャーをやっています。傘下といっても東芝がやっているわけではなく、すべてボランティアです。

――皆さんは、具体的にどのような活動を、されているのでしょうか？

中津川●「キッズ・ベースボールアカデミー」と銘打った幼稚園から中学までの野球教室です。主な活動場所は、川崎市多摩区の生田緑地です。

――皆さんの子どもたちの様子は、どのようなことがありますか？

中津川●まちまちですね（笑）。ハナから拒絶して、ハイタッチして戻ってきたりします。ただ単に「あれがいい！　これがいい！」じゃなく、子どもたちがやり遂げたら、監督やコーチは大きく褒めて、ともに喜びを分かち合う、「よくやったな！」と、愛情を持って叱る込むように指導することが、大事だと私は思っています。

佐々木●川崎フロンターレのスクールに「選生スクール」があります。川崎フロンターレのトップチームと同じグラウンドの敷地内で、指導しています。下は年中さんから上は中学生が対象、大人のお父さんのスクールも担当しています。

経歴をつなって専修大学サッカー部で、指導というよりサポートという形で関わっています。選手監督と並列以前コーチやいて、その下に専任で、監督・コーチと選手のパイプ役のつもりです。

子どもたちが、自発的に考え、行動するために。

――ところで、スクールの子どもたちは、ボールが上がって、良いボールを蹴れるよ、「その方向に、つなぐこともやるんだよ」と一つひとつ、かみ砕いて説明が必要です。子どもたちは楽しくて、成績よくなろうと思っていますので、指導のコミュニケーションが大切です。

私なりの方法はアメとムチでいうと、90のうちアメを7かける。

――アメを多めに、ですね。

中津川●私は褒めちぎります（笑）。ハグ（抱擁）して、ハイタッチして褒めちぎります。ただ単に「あれがいい！　これがいい！」じゃなく、子どもたちがやり遂げたら、監督やコーチは大きく褒めて、ともに喜びを分かち合う、「よくやったな！」と、愛情を持って叱り込むように指導することが、大事だと私は思っています。

「情報」「展開」「ふるまい」この3つができて、初めて、野球人としての技術・戦術等を高めていける。

中津川栄作

株式会社 ●●●●
専修大学スポーツ・サポーターズクラブ 事務局長

――皆さんは、具体的にどのような活動を、されているのでしょうか？

中津川●「キッズ・ベースボールアカデミー」と銘打った幼稚園から中学までの野球教室です。主な活動場所は、川崎市多摩区の生田緑地です。子どもたちは楽しくて、成績よくなろうと思っていますので、指導のコミュニケーションが大切です。

私なりの方法はアメとムチでいうと、90のうちアメを7かける。

――アメを多めに、ですね。

中津川●私は褒めちぎります（笑）。ハグ（抱擁）して、ハイタッチして褒めちぎります。ただ単に「あれがいい！　これがいい！」じゃなく、子どもたちがやり遂げたら、監督やコーチは大きく褒めて、ともに喜びを分かち合う、「よくやったな！」と、愛情を持って叱り込むように指導することが、大事だと私は思っています。

佐々木●川崎フロンターレのスクールに「選生スクール」があります。川崎フロンターレのトップチームと同じグラウンドの敷地内で、指導しています。下は年中さんから上は中学生が対象、大人のお父さんのスクールも担当しています。

経歴をつなって専修大学サッカー部で、指導というよりサポートという形で関わっています。選手監督と並列以前コーチやいて、その下に専任で、監督・コーチと選手のパイプ役のつもりです。

子どもたちが、自発的に考え、行動するために。

――ところで、スクールの子どもたちは、

サッカーを教えて、身につけさせたいのは「自分で考える力」。それは「自ら生きる力」。

佐々木裕司

株式会社 川崎フロンターレ
専任 普及部 兼生スポーツマスター
専修大学サッカー部コーチ

佐々木さんの言うことを素直に聞きますか？

佐々木●素直に聞きます（笑）。少なサッカーに入ってくる子もいれば、全然やってない子もいたり、さまざまですが、「サッカーの楽しさ」を伝える、それを、指導の基本にしています。

それとみね、「サッカーの楽しさ」って、何なのか、試合に勝つとか、点取るとって楽しい、それと、一生懸命やることによって得られる自然と身につきます。子どもは楽しくなければ、どんどんやるからうまくなります。

――子どもの場合は、単純に楽しいということだけにこう振ってくる、年代によって指導内容を、変えたりするのですか？

佐々木●サッカーの場合、小学生の低学年だとゴールデンエイジといって、神経系が発達する年代なので、技術が身につきやすい、中学生くらいになると脳も発達してくるので、戦術的なことを学ぶ、たとえば、グループでゴールを目指すとなど、高校生になるとプロに近いので、フィジカル的にも筋力強化しながら、緻密していく、大学生になると、よりプロに近く、うまい人たちが集まります。ですから、他の選手と差をつけるには、技術的な面よりも選手として「自分で考える」姿勢が、すごく大事になってきます。

サッカーを教えていて感じるのは、「自分で考える」ことが、すごく少なくなってきている、小学生くらいの子どもに「何でミスしたの？」って聞いても、「こういう意図があって、こういうシュートをした」とかじゃなくて、まったく答えられないんですよ。

「自分で考える力」って「自分で生きる力」だと思いますので、普段から次のような指導を心がけています。たとえば、何物が取られていて、「片付ける」と言うのは簡単です。そこではなく、「取られているけど、どうやる？」と問いかけ、子どもたちが考えて、「あっ、片付けたほうがいいよね」と自発的にやるようにさせています。

岩崎●私は仕事とは別にボランティアとして、ラグビークラブのマネージャーをやっています。自分の子どもが所属しており、当初は親として携わりました。大学時代、ラグビー部ではありませんでしたが、コーチの経験もありました。

お話を聞いていて、すごく共通するところがありました。私がいるクラブも幼稚園の年少から中学3年生までいて、同じような悩みがあるし、佐々木さんの「考えさせないといけない」という話、まさに、われわれも考えさせないといけない。

苦労もあれば、大きな喜びもある。

――楽しい活動、苦労もあると思いますが？

岩崎●指導する時間が割けない、という悩みがあります。週末や平日、遠征の合間を縫ったりなど、けっこうきついですね。

――中津川さんは、子どもたちが思うようにとりなかなか聞いてくれないとか、大変だったことは？

中津川●考えてみんですけど、本当にこの部分はないんですよ。ひっぱりたい、ふん張って、親に頼れた、子どもからタイミングをかえた（笑）とかないんですよ、本当に。

先ほどアメとムチと言いましたけど、もちろん厳しくやりますし、ほめられた子ども必ず入ります。でも、その子どもたちが

「楽しい」は、サッカーの試合ではなく、「考えるようになった」「自発的にやるようになった」ことです。

岩崎哲久

株式会社 東芝
東芝体育会系部 総務会社員・東芝
専修大学校友会 常務理事